

如月

千早

序章

「おねえちゃん、あのね」

「ぼく、おねえちゃんのおうた、だいすきだよ」

「よく、来られていますね」

手を合わせていると、後ろから声が聞こえてきた。

住職だろうか。とにかく、この敷地の関係者であることは間違いない姿。

ここにいて、たくさんさんの人生を見てきた、深い皺の刻まれた顔はとても優しい。

「私の両親とは、全然……」

「お若いのに、感心なことですね」

違う。そんなんじゃない。

私は、ここに来なきゃいけないんだ。

お墓の下に刻まれた、たった一人の名前。

本当は、家族の中で、一番最後に刻まなければならない名前。

男の子なのに甘えん坊で、家族の支えがなければ生きていけない、小さな小さな命。

そんな子が、知らない人ばかりの中で一人でいたら、きっと泣いてしまう。

だから、私はここに来なければいけない。

お花を変えて、身体を拭いてあげて、話しかけてあげる。

私は今日も元気だよって。お父さんとお母さんも元気だよって。

……嘘をついて、安心させるために。

この場所では、貫かなければいけない。

少しでも、弟を不安がらせないために。

「私しか、ここに来られる人がいないんです」

また、嘘が増えた。

「おねーちゃん」

いつも私を呼んでは、後ろにくつついてくる子だった。

そのくせ好奇心は旺盛で、「おねーちゃん、あそこにお花があるよ。取ろう取ろう」

「わー、犬だー。せなかに乗ったらきもちよさそうだねー」などとふらふら歩いていくのを、私が何度も止めていた。

私が友達と遊ぼうとするとついてきて、弟の友達が遊びに来ると、その輪の中に引き込まうとした。

とにかく、私と一緒にいたがった。

私と一緒にいる弟は、いつも笑っていた。私もつられるように、自然と笑顔がこぼれていた。

そんな姉弟を見る両親の顔も、常に笑顔だった。

仲の良い父と母。仲の良い姉と弟。

テレビでも見ないような、理想的な家庭。

そんな弟が、家族が、私は大好きだった。

「おねえちゃん、おうたうたってー」

二人で遊んでいると、必ずと言っていいほどせがまれた。

「また？今日は何を歌って欲しいの？」

「えっとねー、くまさんのうたー」

習ったばかりの歌や、一緒に見た子供番組で流れた歌。

聞いた歌を全部歌わせるんじゃないか、というくらい、リクエストが途絶えることは

なかった。

「どうして、そんなに私に歌わせようとするの？」

「だってぼく、おねえちゃんがうたうの、だいすきなんだもん」

満面の笑みでそう答えられたら、拒否するわけにはいかない。
そんな弟を見るのも、私は大好きだったから。

毎日のように続いた、たった一人のためだけのコンサート。

「はい、おしまい」

「ぱちぱちぱちぱち」

私が歌い終わると、小さな手が真つ赤になるまで、拍手してくれた。

「も、もう……そんなに叩いたら、また手がかゆくなっちゃうわよ？」

照れながらそう言うのと、きまつて弟は、

「だつて、すごいんだもん。おねえちゃん、ぜったいかしゅになれるよ」

歌手になれる。

何の根拠もないのに、繰り返し何度も、こう言ってくれた。

「無理だよ。テレビの人は、みんな私よりうまいんだよ？」

「えー、そうかなあ。ぼくはおねえちゃんのおうたがいちばんすきだよ。」

おねえちゃんがかしゅになつたら、ぼくが、ファンになつてあげるよ」

ありがとう。

何度も、こう言いたかった。

「ただど恥ずかしくて、言葉にすることはなかった。」

「そ、そろそろごはんね。行きましよう」

「うんっ」

歌手。もし、もしなれたら、この子は喜んでくれるかな。
なれたらいいな。でもきつと、すごく難しいんだろかな。
私には、無理だよな。

歌い終えた後に考えるのは、いつも同じだった。
そして、出る結論も、いつも同じ。

「この子だけ聞いてくれれば、それでいいや」

「ほら、みんな待つてるわよ。早く行きなさい」

「でも！。おねえちゃん、ほんとにいつしよにいかないの？」

「今日はクラスの子みんなで遊ぶんだよ」

「人なつっこい弟には、次々と友人が出来ていった。」

「そんな仲良しグループで、遊ぶ約束をしたらしい。」

その輪の中に、当然のように私を連れて行こうとする弟を説得するのに、少々時間を要してしまった。

「おねえちゃんがいないと、つまらない……」

「そんなことないでしょ、仲良しなんだから。みんなと一緒にいると、楽しいでしょ？」

「うん……でも……」

「しょうがない子ね。帰ってきたらいっぱい遊んであげるから」

「ほんと？ おうたうたしてくれる？」

「うん。今日は特別に、いっぱい歌ってあげる」

「わーい！ じゃあいつてくるね！ おねえちゃん、やくそくだよ！」

手を振りながら、何度も何度も「約束だよ」と繰り返す弟を、お互いが見えなくなるまで見送った。

……まったく。さすがに何人もいる前に出て行くのは恥ずかしいわよ。
そう思いながら、自然にこぼれだす笑顔を、止められなかった。

同時に、そばに誰もいなくなつて、少しだけ寂しさを感じた。

よし、今日は、思いっきり歌つてあげよう。

リクエストだけじゃなくて、私が好きな歌も、歌っちゃうんだ。

私はこんな歌が好きなんだって、教えてあげるんだ。

気に入つてくれるかな。気に入つてくれるといいな。

もつともつと、二人の好きな歌が、増えてくれるといいな。

そして、ずっとずっと、聞かせてあげられたらいいな。

今日。明日。未来。歌う私、聞く弟。

想像するだけで、すごく楽しかった。

幸せがずっと続いていくと、本気で思っていた。

たった一人の観客のために、最高の声を、歌を届けようと、準備をした。

力いっぱいの拍手を。私にとつてたった一つの、だけど、最高の拍手を、

この身に浴びたくて。

そのための最高の歌を、届けたくて。

だけど、その機会は、二度と訪れなかった。

あの後姿を最期に、永遠に、失われた。

知っている人、知らない人。

黒い服に身を包んだたくさんの人が、途切れることなく、両親に挨拶を繰り返していた。同じクラスの子らしい、同年代の子たちも訪れた。その人数の多さに、弟がいかに慕われていたのが、よくわかった。

みんな泣いていた。

父も母も、泣いていた。

でも、私は泣かなかった。

私だけは、泣いちゃいけないと思っていた。

みんなで泣いたら、悲しむと思ったから。

私まで泣いちゃったら、弟まで一緒になって泣いてしまうかもしれない、思ったから。

溢れそうになる度に、手をぐっと握って、唇を噛みしめて。

私がつかりしなくちゃ。

父が挨拶をしているときも、お経を読んでもらっているときも、ただひたすら、

思いつきり出したい声を、押さえつけていた。

「お姉ちゃん、偉いわね」

誰かのお母さんらしき人に、そう言われた。

違うよ。本当は、私だって泣いちゃいそうなんだから。

全然、偉くはないんだよ。

我慢して、我慢して、頑張って。

とうとう、式が終わるまで。

全てが終わって、みんなが帰って、家族の三人だけになるまで。

涙を、こらえることが出来た。

もう、いいよね？

お父さんとお母さんにだけなら、泣いちゃってもいいよね？

私、がんばったよって、言ってもいいよね？
ほめてもらって、だっこしてもいいよね？

もう、目の淵まで溜まっている涙。

少しでも早く、身体中からなくなってしまうまで泣きたくて、おそろく、ずっと泣きっぱなしの両親のところへ、駆け寄っていった。

「お父さん、お母さん………？」

「それじゃあ、あなたは私が悪いともいうの？」

「誰もそんなことは言っていないだろう！」
「そう言ってるようなものじゃない！」

空気が、違った。

弟がいなくなつたことを悲しんでいるような雰囲気は、微塵も感じなかった。
聞いたこともない大きな声。見たこともない歪んだ顔。

一瞬、父や母だと、思えなかった。

（お父さんとお母さん、けんかしてる………！）

そう気づくまで、数秒はかかった。
だつたら、止めなきや。

もう、この家には、お父さんとお母さんと、私しかいないんだから。
お父さんとお母さんがけんかしてるんなら、止められるのは、私しかいないんだから。

「甘えようと思ったことも忘れて、二人の間に割りこんでいった。
「お父さん、お母さん！けんかしちゃ、ダメだよ！いつとも仲良くしなきゃって、
私たちに、言ってたじゃない！」

気づいた母が、私の方に振り向く。
その時の表情と、私に言い放った言葉を、私は、一生忘れない。

「黙りなさい！あんたみたいな子供に、何が分かるっていうのよ！」

衝撃だった。

今まで名前がお姉ちゃんと呼んでいた私を、「あんた」よばわりしたこと。
石ころか何かを見るような、蔑んだ視線。

初めて見る、私の知らない母に、続けようとした言葉が止まった。

「おい、よさないか！子供の前で！」

「……」

父に怒鳴られ視線を逸らす、その表情は、変わることがなかった。

隙間なく覆って、みんなを溺ませている、暗くて重くて冷たい空気が、部屋の中を

「お前もいいから、部屋に戻りなさい」

そう言われたとき、気づいてしまった。

（お父さんも、名前で、呼んでくれなかった……）

涙なんか、すっかりなくなっていた。

これからどうすればいいのか。部屋の中で、そればかり考えていた。
お父さんもお母さんも、いつぱい悲しくて、いらいらしちゃってるんだ。
だから、いつもあんなに仲良しなのに、けんかしちゃうんだ。
またすぐに、前みたいに笑ってくれるよね。
私のこと、「千早」って、呼んでくれるよね。

だから、ダメだよって、言おう。

お父さんとお母さんが、悲しくて何回けんかしちゃっても、私が、何回でもけんかしちゃダメだよって、言おう。

そうしたら、もつとすぐに、仲良しになってくれるよね。

三人で、また笑って、ごはん食べられるように、なるよね。
「よし、がんばろー！」

翌日から、二人の喧嘩が治まることはなかった。

その度に、間に割り込んで、やめるように説得してきた。
子供だったけど、本当に真剣に。

当時は意味の分からない罵声を浴びせられたけど、それでも、ただ元の仲良しに戻って欲しくて、何度も何度も訴えた。

鬼気迫る二人の迫力に、部屋で泣いてしまうこともあったけど、やめなかった。
もう、私しかいないんだ。

私しか、二人を止められる人は、いないんだ。

それだけを、胸に。
「おかあさん！おとうさん！」

月日が流れても、夫婦、いや、二人の喧嘩はますますエスカレートするばかりだった。あの日までの優しかった表情は完全に失われ、別人のような表情が、そのまま二人の元の顔だという認識が、すっかり出来上がっていた。

言葉を交わせば始まる、罵りあい、物の投げあい。

日課のように、その場を片付けるのも、私だった。

年齢を重ねるに従って、罵声の内容も少しずつ分かってくる。

これを本当に幼い私に浴びせていたのかと言うような、醜く、人のことを何も考えていないような、冷たい言葉。

それもだんだんと、慣れていった。

こういうことを平気で言う人間なんだと、心の奥底で理解し始めていた。

それでも私は、二人の間に入り続けた。

ひたすら、喧嘩はやめてほしいと、訴え続けた。

少しずつ忘れかけていく、あの日までの二人の笑顔。

思い出して欲しいと、何度も、何度も。

制服を着るようになった頃から、私への態度の変化に気づいた。

私と、目を合わせようとしない。

話しかけても、返事が返ってこない。

「お母さん、明日……」

父の応答も、似たようなものだった。

ある日、いつものように止めに入ると、その時までお互いを睨みつけていた視線を、

そのままと私に向けてきた。

勢いそのままに、私に言葉をぶつけてくる。

「何度言ったらわかるの！ あんたが口を出すようなことじゃない！」

「そんな事ない！ 私は二人の子供だもん！」

「……」

はつきりと聞き取れてしまったら、逆上してしまつたかもしれない。

そのくらい、母、いや、彼女の言葉は、罵声に慣れてしまつたはずの私でさえ、

耳を疑うものだった。

「お前！ 実の娘に向かつて、何てこと言うんだ！」

「うるさい！ あんたの娘だなんて……」

彼の言葉が聞こえたと思うと、また喧嘩が始まつた。

もう、止められなかった。

私はふらふらと、自室に戻ることに出来なかった。

信じられない。信じたくない。

だけど、あの言葉を平気で使える限り、間違いはない。

知らないふりをして喧嘩を止めるなんて、もう、出来ない。

私は、あの二人に、煙たがられている。

私の存在自身が、二人に、嫌われている。

どうして二人は、喧嘩してるの？

悲しかったからじゃ、なかったの？

弟がいなくなつて、心に穴が開いたのは、私だつて同じ。だけど、もう、何年もたつたよ？

三人で仲良くしなくちゃ、駄目なんじゃないの？

そう思つて、今まで、頑張つてきたのに。

どうして私自身が、嫌われなくちゃいけないの？

二人には、あの子がいれば、それだけでよかったの？

お父さんとお母さんの子供は、あの子だけじゃないのに。

私も、いるのに。

私じゃ、ダメなの？

二人には、私の気持ちには、届かないの？

あの日から、八年がたった。

全力で訴えてきた言葉に、意味がなかったと知ったとき。

数限りなく繰り返してきた年月を、全部否定されたとき。

それでも一緒に暮らしている原因が、「単なる世間体」だと理解できたとき、

私は、人と話す術を、失っていた。

煙たがられていた私でも、高校には進学出来た。

当然のように「進学しろ」と言われたときは少々意外だったが、

「ああ、そうか……世間体ね」

こんな家庭になつても、そんなくだらない事を気にして別れないあの二人が、子供を高校に行かせないなんて選択、するわけがないよね。

そう思つたら、自嘲たつぷりの笑みが浮かんだ。

説得を一切やめた私には、皮肉にも、その作業に宛がつていた時間をそのまま自由にすることが出来た。

ただ、時間の使い方も知らず、友人もいない私には、何をしたいかの見当がつかなかった。

「時間を無駄にだけは、もうしたくない」

その一心は、必然的に勉強へと向けられた。

成績が上がつていくたびに、クラスメートの間の壁が、ますます厚くなつていくのをひしひしと感じていたけど、どうでもよかった。

勉強しているから、結果が出るだけ。当たり前のこと、一喜一憂する必要はない。私には、それくらいしか、やることはないんだから。

それでも歌だけは、忘れることがなかった。

この高校も、合唱部があるという、ただそれだけで選んだ。

二人の気の済むように、その中で一番レベルの高い所を選んでおいた。

せめて、歌だけは、自分の満足するようにやりたい。それだけを胸に、淡い期待を込めて、校舎の門をくぐつたものだった。

現実には、その期待さえも、壊した。

「時間ね。じゃあ今日は、これで解散」

音合わせがうまくいかなくても、時間になれば、必ず終わってしまう。

そんな練習方法に納得できず、私は何度か部長に詰め寄った。

「部長。もう少し、もう少しだけ練習すれば、今のハーモニー、うまく行くようになると思うんですが」

「でも、もう終わりの時間だから。明日、もう一度練習しましょう」

「そんな……部長！」

入部したばかりだとか、そんなことは関係ない。

言わなくちゃいけないことは、ちゃんと、言わなくちゃ。

せめて、大好きな、歌のことだけは。

「如月さん、貴方の考えも、その声も、とっても素敵。この合唱部に来てくれて、本当によかったと、私は思ってる」

お嬢様らしい微笑みが、私に向けられる。

「ただどね、如月さん」

それでも私の気持ちは、

「歌って、楽しく歌うものだ、と、私は思うの。ここで歌う以外にも、いろんな経験を

して、それも歌に生かすのが、大切だと思うの」

また届かない。大好きな歌に対する気持ちでさえ、人に、届かない。

「でも……でも、あとほんの少しなのに……！」

確かに、そうかもしれない。でもね、如月さん」

部長の視線が、私の後ろへと向けられる。私も後ろを振り向く。

そこにいたのは……私を見つめる、上級生の面々。

見つめるといふより、睨みつけている、という表現の方が正しいだろう。

「一年のくせに、生意気な」

「こつちだって、この後予定があるんだよ」

「部長に気に入られてるからって、でしゃばりやがって」

口には出さないまでも、表情と目線で想像がつく、敵意に近い眼差し。

怖さは、まったく感じない。

恐らく今日も自宅で罵りあっているあの二人と比べたら、年上とはいえ、ちよつと大きな赤ん坊みたいなものだ。

「ね？ ハーモニーはうまくなっても、部員同士の仲が気まずくなったら合唱はできないと、私は思うの」

それでも、裏表のなさそうな、心から困りきっている顔の部長を

見ると、これ以上我を通すことが出来ない。

「わかり……ました」

「ありがとう、如月さん。そんな貴方が、大好きよ」

……失礼します」

部長とも、他の部員とも、一切目を合わせることなく、荷物を掴む。

そして、こう思いながら、部室を後にした。

（もう、来ることもないかな）

また、不要に開いた時間が出来てしまった。

今の時間に家に帰っても、どうせ真っ最中だろう。

部屋にいたって、ストレスが溜まるだけだ。

一通り終わってからじゃないと、明らかに用途の違う使われ方をした本や家具を片付ける事も出来ない。

ただでさえ、また歌う場を失ったというのに、こんな減入った気分のまま、帰るなんてことはしたくない。

「こんな中途半端な時間に、出来ることと言ったら……
……あそこしか、ないよね」

ここからちよつと先に行ったところにある、電気店の立ち並ぶ大通り。

その一角にあるCDショップは、品揃えがとても充実していた。

流行の音楽はもちろん、私の好きなクラシックが特に豊富で、今まで聴いたことのない音や名前を、たくさん知ることが出来た。

偶然にそこを見つけてから、ちよくちよく通うようになった。

「今日は、何を買おうかな」

あそこだつたら、何かに触れられそう。

沈んだ足取りをほんの少しだけ軽くして、そのショップへと向かっていった。

いつものように、脇目も振らずにクラシックのコーナーへと向かう。

ちよつと奥まった所にあるので、たどり着くまでにやや時間がかかる。

その間、店内に流れる、普段テレビで聞けるような歌やBGM。

聞き流しながら足早に歩くのが、いつものパターンだった。

普段流れてるような音楽に、興味はなかったから。

だけど、この日は、違った。

「初めは、ピアノの伴奏に、少し興味を引かれて立ち止まった。

「あ、いいメロデイかも」

そこに絡んできたのは、無機質な電子音。

私が聞かない、いわゆる打ち込み系の音。

普段なら、そのまま通り過ぎてしまうのに、足が動かない。

そして、日本語の歌が流れてきたとき、

胸が、熱くなった。

なんだろう、この気持ちは。

苦しくて、切なくて。

初めて聞いた歌なのに、歌詞の一つ一つが、心に染み入ってくる。

私の何かを知っているように、語りかけてくる。

今まで、味わった事のない気持ち。

これは、何？

ぽたっ。

手に、僅かな暖かさを感じた。

目に映ったのは、一粒の、雫。

「……まさか」

頬に手を当てる。そこに、同等の暖かさを感じる。

私は、店の真ん中で、涙をこぼしていた。

それでも歌が終わるまで、そこから動く事は、出来なかった。

「だ、大丈夫ですか、お客様」

心配になったのか、一人の店員が声を掛けてきた。

「何度か、CDを探してもらった事のある人だった。」

「な、何でもありません。あ、あの……」

「うまく、声が出ない。」

「今、流れていたの……なんていう、曲……ですか？」

「必死に普通を装って、質問をする。」

「……少々お待ちくださいませ」

「何かを察したのか、商売上無粋な追求はしないのか、特に態度を変える事もなく、

店員は陳列棚の一角へと歩いていった。

「ゲームCDの……コーナー……？」

「私には未知の領域だった。ゲームは何となく、子供がやるものだと思っていた。」

「その中に、本当に今の歌が……？」

「まあなく店員が戻り、一枚のCDを差し出した。」

「こちらの三曲目が、ただいま流れました歌となっております」

「何かのゲームのサウンドトラックらしいそのジャケットに描かれていたのは、

眠ったように横たわる、一人の女の子。」

「普通の女の子と大きく違うのは、その子を守るように包み込む、大きな白い羽。」

「その姿に、なぜかまた、涙腺が反応する。」

「申し訳ありませんが、ただいまの曲は、現在のところシングルカットはされていない

ものでして、こちらのCDのみに収録されたものとなっております」

「これが……今の……」

「こちらには、ゲームCDコーナーの『あ行』の棚に展示しておりますので、

「ぜひゆつくりとご覧になつてくださいませ」
「いえ、これを……ください」
ゆつくりしてなんて、いられなかった。

会計を済ませると、本来の目的だったはずのクラシックコーナーに目もくれずに早足で店を出た。

まだ喧嘩しているに違いない時間帯だったが、それすら関係なかった。早く聞きたい。一人でじつくりと、聞いてみたい。

「三曲目、三曲目、三曲目」

呪文のように繰り返し呟きながら、自宅へと急いだ。

CDを買って帰る途中、ワクワクするのはいつものこと。

だけど、胸が熱くなってドキドキしたり、涙がこぼれそうになる感覚は、生まれて初めてだった。

⌈	⌈
:	:
:	:
:	:
:	:
:	:
:	:
:	:
:	:
:	:
!	!
⌋	⌋

挨拶の必要もない我が家に入ると、いつものように何の生産性もない罵りあいがある。飽きることなく続いていた。

でも今は、そんなのに構っている暇はない。

全力に近い速度で階段を駆け上がり、自室のドアを勢いよく閉める。

着替える間も惜しく、制服のまま、CDの入った袋を取り出す。

早く。早く。

取りにくいシュリンクを何とか破ると、CDをセットし、ヘッドホンを装着する。

いつもは、特にクラシックはアルバム全体の流れが重要なため、最初から聞くのが常なのだが、今は、そんな余裕はなかった。

「ごめんなさい。後で、ちゃんと聞きますから」

あのピアノ、あのエフェクト、あの電子音。

ああ、間違いない、この曲だ。

理解した刹那、条件反射のように、涙が溢れてきた。

ヘッドホンが、店内の他の音も、下の階の雑音もかき消す。

すると、暗闇のはずの世界に、何か浮かんできた。

「うそ……」

浮かんできたのは、私の家。

今ではありえない、あの二人の笑顔。そして、

「おねえちゃん」

一緒に駆け回った、公園。

一緒に書いた、お互いの絵。

二人だけの、コンサート。

いつも一緒にいた……弟。

八年という月日が。変わってしまった家族が、私が。忘れかけていた、想い出が、笑顔が。まるであの時そのままに、鮮明に浮かんで、流れていった。

「おねえちゃん、おうたうたってー」
「おねえちゃんがかしゅになったら、ぼくが、ファンになってあげるよ」

全然似ていないのに、羽の少女が、弟とリンクする。そうか。これが、涙が止まらない理由。

「……うっ……」
「このゲームがどんな内容なのか、私は知らない。もしかしたら、全然違うのかもしれない。」

「ただど、この曲は、この歌詞は。」

「私にとつて大切な、たった一人の弟のことを。」

「永遠に失われてしまった、かけがえのない毎日のことを。残酷に、それでいて、優しく包み込むように。」

「思い出させて、くれるんだ。」

「ううっ……」
「……あああ……」

「くしゃくしゃになった顔で、歌詞カードをめくる。」

「詩の内容を、頭でなく、心で、自分なりに読み取る。」
「……もう、駄目だった。」

「うわあ……」
「……あああああ……」
「……！」

八年前に、ずっと我慢して、そのままなくなってしまった涙。

「うわああああん……なんでも……なんでよおおお……！」

私だけは泣いたらいけないと、強がってしまった心。

「やくそく……したじやない！うた……いっぱいうたってあげるって……やくそく……」

したじやない……したじやないよ……！」

八年もの、長い時間を経て、

「やだよ……いなくなっちゃ、いやだよ……！」

私はようやく、弟のために、泣くことが出来た。

リピート再生にしていた三曲目が、繰り返し、繰り返し、私を励ましてくれた。

一晩中、私はこの曲を聞いていた。

目の周りを、真っ赤に腫らして。

涙でぐしゃぐしゃになった歌詞カードを、手放しもしないで。

「すごいなあ……」

こんな曲を作る作詞家、作曲家。こんな歌を歌える歌手。

会ったこともない見ず知らずの人間に、こんなに感動を与えられるんだから。

歌に込めた気持ちを、伝えることが出来るんだから。

「私とは、大違いね……」

本心から、全力で叫んだ思いが伝わらない。

八年前から、今までずっと。

私に、言葉を伝える能力は、ない。

「ぱちぱちぱちぱち」

……え？

「おねえちゃん、ぜったい、かしゅになれるよ」

目の前の、深くて濃い霧が、だんだんと薄れていく。
確かに私の言葉は、人には届かない。

でも……もし、もしも。

「それが、歌だったら？」

この歌みたいに、思いを、気持ちを、メロディに乗せて、全力で歌ったら？
何も変わらないかもしれない。
でも、たった一つだけ、言葉だけのときとは違った、確かなことがある。

「私の歌で、たった一人だけ、気持ちの届いた人がいる」

小さな手で、拍手をしてくれた。
すごいって、言ってくれた。

いつも私の歌を、楽しみにしてくれた。
たった一人の、最高の観客が、私にはいた。

やってみよう。いや、やるしかない。

私に出来ることは、歌しかない。

なら、その歌を、極めてみよう。
たった一人の言葉を、信じて。

「……なろう、歌手に！」

瞬間、私はパソコンへと向かっていった。

歌を歌えるプロダクションを探すために。

いてもたってもいられなかった。

高校を卒業するまでなんて。いや、一分一秒でも待っているなんて、とても出来そうになかった。

私が、あの二人の言うとおり、高校へ行くことにしたのは、理由がある。

本当は、すぐにでもこの家を出て行きたかった。

だけど、社会経験のない私でもわかるくらい、現実是非情で、厳しい。

今、家を出たところで、高校中退という身分では、働ける環境なんか全くない。

女性でも、最低高校卒業、という学歴を持っていないと、一人の人間として扱われない。

そのうえ成人もしていないとなれば、部屋を貸してくれるところも皆無。結局は親に

連絡されて、世間体のために連れ戻されるのが関の山。

働く人を応援するとか何とか言ったところで、これが、現実だ。

でも、芸能界なら、歌の世界なら。

年齢も、学歴も、関係ない。

成功すれば何歳でも、自由に暮らすことが出来る。

私を煙たがる二人から離れて、一人で身を立てることが出来る。

大好きな歌を歌う事で、生きていける。

そうとなれば、一刻も早く、行動を起こさなければいけない。

一晩中寝ていないという事実も吹き飛ばし、慣れない手つきでキーボードを叩いた。

ほとんどのプロダクションは、「まずは養成所に入って。入会金は……」とか、三カ月後に大掛かりなオーディションをやるからそれに参加してくれ」とか、そういうのばかりだった。

「ただ、そんな時間も、私には惜しい。大手である必要はない。」

どんなにきつくても、歌の世界で通用するように鍛え上げてくれる所ならどこでもいい。結局は、個人の思いと実力が、ものを言う世界だから。今の私には、選ぶ権利も、実力もない。だから、トップを目指すための、歌を極めるための、環境を。

『アイドル候補生、随時募集』

「随時……」 検索を繰り返していると、この一文が目にとまった。

魅力的な単語と同時に、アイドルという言葉に、引っ掛かりを覚える。アイドルは、違う。アイドルは、自分の気持ちを、伝えたりしない。

自分を殺し、相手の好むように演じ、相手に満足を与える職業。私の望むものとは、180度違う。それが、私の考えているアイドルというものだった。

「ただ、今すぐに連絡が取れる。道が、開ける可能性がある。」

他に、こんな環境が見付かるだろうか。

「このときを逃して、ここが応募を締め切ってしまったら、何ヶ月も先まで待たなくては

いけないのではないか。どうしたら……」

「正直に、話そう」

この結論に達したとき、何を考えてるんだ、と思う自分がいた。人に気持ちを伝えられない私がこんな事をしたって、受け入れてくれるはずがない。

それでも、自分の気持ちを曲げることは、絶対に出来ない。

どうせ、1メートル先も見えないような、暗くて、不安定な道なんだ。

聞 ことの言葉に全てを任せるのは嫌いだけど、こう思うきっかけをくれたのも、あの歌を

もっと普通の女の子みたいない言い方をすれば、運命。

せつかくだ。その運命っていうもの、使わせてもらおう。

もちろんだ、その後は自分で切り開くけど。最初の、一手だけは。

やや震える手を強引に止め、携帯を開く。

間違いのないように、画面を見ながら、一つ一つ、数字を押していく。

全てを押し終えると、繋がった証のコール音が鳴り響く。

一回目が鳴り終えるかどうかの、そのとき。ガチャッ

「はい、765プロダクションでございます」

「こ、ここ？」
電話口で案内された住所にたどり着いた私は、思わず声をあげてしまった。

住所にある通りには、商店やよくわからないビルが立ち並んでいる。

「その中の一角にある、更によくわからない建物。」

「765」と無造作に窓に書かれた文字が、かろうじて聞いた名前と一致する。
あれは、ビニールテープか何かじゃないだろうか。

「本当に、ここが事務所なのかしら……」

隣はラーメン屋だし……

何度も何度も聞いた住所を読み返し、間違いがないことを確認する。

普段なら、絶対に一人で入ろうとは思わない場所。

そこが、これから面接を受ける、765プロダクションだった。

入り口の前に立つ頃には不安でいっぱいになっていた。

もし万が一、非常識な場所だったら。何か良くない事に、巻き込まれたりしたら。
ただでさえ、芸能界という裏の分らないところ。

ちよつと怖い気もする。

「……だけど、私は」

歌で、生きていく事を決めた。

少しでも早く、一人で生きていく事を決めた。

迷っている時間は、もうどこにもない。

私は前に、進まなければならない。

「……ええい」

ピンポン

「普通の家と同じようなチャイムの音と共に、はい、すぐ行きまーす」

知人の家にも行ったときのような、挨拶。

ただ違ったのは、その声が、電話口の声と同じだったこと。

「間違いない。ここが、事務所なんだ。」

「せ、先日お電話した、如月と申します」

「あー、千早ちゃんね？ いらつしやーい」

いきなり名前で呼ばれ、少々あせる私を気にもせず、ドアが開かれる。

そこにいたのは、ショートカットの、可愛らしさと大人っぽさが入り混じった女性。

「ようこそ、765プロヘー！」

「開口一番。」

「え？ あのだ……」

「……あれ、ちよつとハズしちゃったかあ。ごめんね、女の子と話すのなんて、

久しぶりだったから。やり直すわね……コホン」

何が起こったかわからず、呆然としていると、

「如月千早さんですね？ お待ちしております。恐れ入りますが面接官の到着まで、

今しばらくの間、会場にて待機いただけます。お願い申し上げます」

ついさっきのテンションが嘘のような、丁寧でしつこくない案内。

彼女の不思議な雰囲気、に流されるように、私は事務所の中へと一歩踏み込んだ。

「……この事務所には、驚かされっぱなしだ。」

「確か……社長室つて、言つてたわよね……」

面接会場だと案内された部屋。

確かに「社長室」と書いてあった。

もしかして、社長が直接面接をするのだろうか、少し緊張したはずだった。
……つい、さつきまでは。

多分、初めて入った人は、誰でもそう思うだろう。

あるのは、テーブルとソファくらい。

窓には裏返された『765』の文字。

ああ、やつぱりあれ、ビールテーブルなんだ……

「これでは社長室というか、何と言うか……」

「本当に、大丈夫なのかしら……」
別の意味での不安が、心に生まれていく。

五分、十分……

無音の中、時が過ぎ去っていく。

部屋を見回しながら待っている内に、私の心には、あせりのようなものまで生まれていた。

私がここに電話した事は、正しかったのだろうか？

もつと、慎重に選ぶべきではなかったのだろうか？

いや、一刻も早く自分の道を開くためには、これでよかったんだ。

でも……でも……

幾人もの私が会議を始めた時だった。

「ほら、社長！千早ちゃんが待ってますよ」

「社長！ちやつちやと終わらせないと、間に合わないつすよ！」

「そうあせつちやいかんよ君。未来のスターを育てるのが、我々の責務というものだよ」

「今の仕事の責務も考えてくださいよ！」

突然、部屋の外が騒がしくなる。

何やら慌てた声の男性と、独特のトーンを持った男性の声。足音が、徐々にこちらに近づいてくる。

もしかして、この人が……

慌てて立ち上がると同時に、ドアが開かれた。

「いやー、待たせてしまったようだね。申し訳ない」

「……」

この事務所には、本当に驚かされっぱなしだ。

全身を真っ黒に包んだ、スリッ姿。

人のよさそうな、どこことなく頼りなさそうな声。

芸能界にいるというオーラを一見感じさせないこの人こそが、

「よく来てくれた！私がこのプロダクションの社長、高木だ」

私の未来を導くきっかけになる。

「……では如月君の志望は、歌手、ということなのかね？」

「はい。アイドルに興味はありません」

「……」

履歴書の確認事項から始まった面接。

比較的スムーズに進んでいたが、『どんなアイドルを目指すのか』に話が及び、私が答えたとき、今までのムードを吹き飛ばすような沈黙が訪れた。

それはそうだろう。『アイドル候補生』を募集している事務所に訪れた人間が、アイドルを全否定する発言を、募集している本人の目の前で堂々と言っているのだから。馬鹿なのは、自分が一番よくわかっている。

「ただ、これだけは妥協出来ない。」

「なぜだね？歌手という名前にこだわらなくて、アイドルだって歌は歌えるし、

一流のアーティストに曲をつけさせる事も可能だが」

「……そういう問題じゃないんです」

大人にとつて、私のこだわりは、何の意味も持たないものだろう。

呼び名なんか、それこそ呼ぶ人間の勝手だ。

それでも、歌手でなければ、私のやることに意味はない。

「私がこの世界でやりたいことは、

伝えたいんです」

言葉で人に何かを伝える事は、私には出来ない。

両親でさえ、何一つ届かなかった。

「私の思いを、気持ち」

「ただ、歌なら。」

メロディーの力を借りて、聞いてくれる人の心に、直接届ける事が出来る。

距離も、時間も、関係なく。

「そのために、私は、歌手になりたいんです」

私にとつて、絶対に外せない事。

どんなに過酷で、周りから笑われても、決して譲ってはいけない事。

「ふーむ……」

これは参った、とでもいうような表情で、小さく唸る。

「アンタさあ、顔はすごいいいんだから、磨けばいいアイドルになると思うんだけど」

後ろですつと話をきいていたもう一人の男が口を挟む。
口調は少々悪いが、もしかしたら、褒めてくれたのかもしれない。

「ただ、それじゃ、駄目なんです」

「きっぱりとそう言う」と、

「……あつそ」
それつきり、また、沈黙が訪れる。

時間だけが経過し、後ろの男の人のイライラした様子だけが、明確に伝わってきた。
「そういえば、この先も仕事があるみたいな話、してたな。」
「じゃあ、このままフエードアウトかな……」
何となく、そう考えていた。

だから、次に告げられた言葉が、すぐに理解できなかった。

「では、歌ってみたまえ」
え？

「テストの開始だ。何でもいい。得意な歌、好きな歌。どんな歌でも構わない。
今、ここで、歌ってみたまえ」

「好きな歌？何でも？私は困惑する。」

「ちよ、社長」。マジで時間ないっすよー」

「おお、ちようどいい、君も審査員として、参加したまえ」
「な！俺もっすか！俺関係ないじゃないすか！」

「何を言っている。さっき口を挟んだ以上、もう君も無関係ではないんだよ。さ、男なら潔くこつちにきたまえ」
「あーあ、この人のペースに、いつつもノセられちまうんだよね」

彼の中で、着々と決まっていくなかに、私はとまどばかりだった。

この社長室にあるのは、机とソファにテーブルだけ。

人と話すための場所であり、歌う場所にはほど遠い。

何よりも、ここには音響の類が全くない。スピーカーどころか、ラジカセでさえも。

「でも、あの、伴奏は……」

「伴奏？」

私の言葉に、ピクリと眉毛が動いたような気がした。

「如月君。君は伴奏がないと歌えないと……そう言うのかね？」

当たり前だ。伴奏無しで、何をどうやって歌えというのか。可能性としたら、

ア・カペラで、音程等を試す、ということだろうか。

それにしたって、この環境じゃ……

半ば非難するように、社長と呼ばれる人を見る。

「……！」

彼はじつと、私を見つめていた。

不快なものを感じさせない、まっすぐな目。

怖くはない。それなのに、圧倒される眼差し。

視線を逸らす素振りも見せずに、彼は、話し始めた。

「君は……歌手になりたい。そう言ったね」

「はい。アイドルに興味はないですから」

再度、ここにいる事と矛盾する宣言を、繰り返す。

その台詞に、なぜか、満足そうに頷き、こう続けた。

「歌を歌うということはね。相手に気持ちを伝えるということだ。」

聞いてくれる人。そして、伝えたい人にね」

「……伝えたい人……」

「そこには、いろいろなアクセントがある。機材の故障、マイクのトラブル。」

世の中には、自分が想像もし得ない事が、簡単に起こるんだよ。

何十人もの優秀なスタッフが、細心の注意を払ったとしてもね」

私の目を見つめたまま、言葉は続く。

「そんな時に君は、『伴奏がなかったから』『マイクが使えなかったから』という理由で

気持ちを伝える事を止めてしまうのかね？」

「え……」

「そんな気持ちで、歌を歌うのかね？ 君の気持ちは何かを理由にして諦めてしまうような、

弱くて小さなものだったのかね？」

声のトーンも、喋り方も、何一つ変わってはいない。

なのに、一言一言が、私の胸に突き刺さる。

そんな事はない。

そう言いたいのに、言葉になってくれない。

「……君の、言うとおりなのかもしれない」

不思議なほどに嫌味のない表情で、小さく笑った。

「確かにアイドルでは、気持ちは伝わらないかもしれない。だけどね、如月君。」

例え歌手でも、環境や機材で左右されるような気持ちじゃ、届かないんじゃないかな」

ぐつと、握りこぶしを突き出す。

予測ができない事態に更にとまどうと、さっきよりもはっきりとした笑顔で、親指だけを、ぐつと突き出す。

その親指を自分の左胸に当て、とんとんと、二回叩いた。

「気持ちちは、マイクやスピーカーを通してじゃなく、ここで伝えるもんだ。少なくとも私は、そう思うよ」

「………」
初めて、だった。

怒るでもなく、媚を売るでもなく。ただ淡々と、理を説く。

少なくとも一回り以上、おそらく二周りは年齢が違うであろう、初めて会った小娘に。

「……この人は、本気で私に語りかけている。」

「いやー、若者相手に、ちよつとクサかったかな？ スマンスマン」

嘘ばかりだと思っていた。

芸能界に限らず、大人の世界というのは、嘘と虚飾、妥協にまみれた、上辺だけの、常に腹を探り合うものだと思っていた。

そのくせ世間体ばかりを気にして、憎しみあっているのに離れたりせず、見えない所で本性をむき出しにして憂さを晴らすものなんだと、思っていた。

少なくとも、私の家族であるはずの二人は、そうだった。

ただ、芸能界という裏のある世界で。

アイドルという、自分を殺して生きていかねばならない人たちを育てている立場の、トップのはずである、この目の前の人は。

まっすぐに、私の目を見つめて、語りかけてくる。
人を育てるといふ事を、ちゃんとわかっている。
少なくとも、あの二人よりは。

「ありがとうございます」

大人に対して深々と一礼をしたのは、初めてかもしれない。

「ん？私は何もしておらんよ？」

「いいんです。社長の態度から、私が教えていただいた事に対して、ですから」
初めて、「社長」という名称で呼ぶ。

「では、テストの方、よろしくお願いします！」
もう一度、社長と審査員に向かって、頭を下げる。

「……うむ」
「……はいよ」

何を歌つてもいい、となれば、歌うのは、あれしかない。

私を、ここに導くきっかけをくれた歌。

八年前の事を、思い出を、未来を。全部ひつくるめて、私に与えてくれた歌。

この歌を、私は一生、忘れない。

今の気持ちを全部、この歌に込めて、弟以外の人の前で、歌う。

私の、歌手人生のスタートとなる歌。

「聞いてください、『鳥の詩』」

「すうっ……」

呼吸を合図に、頭の中にピアノのメロディーが流れる。

一見無機質に思える打ち込み音が絡み、人だけでも、機械だけでも味わえない絶妙な

ハ―モノ―を奏でていく。

声が、自然に溶け込んでいく。

「おお……これは……」

どこかで、誰かの声が聞こえた。

それが合図になったように、ゆっくりと、目の前に白い光が降りてくる。

なぜか、それが正しいと感じた。

逆らう事をせず身を任せると、白い世界の中に、私一人だけが包まれる。

これから歩き続ける、誰にも頼らず、頼らせず、自分の力が絶対の評価をされる世界。

― 自ら飛び込んだこの世界の第一歩の中で、私はこの声を、今、一番遠くにいる、一番届けたい人の下へと贈る。

聞こえる？

八年もかかったけど、私、歩き出したよ。

自分の足だけで、歩いていく事に決めたよ。

貴方だけが褒めてくれた、貴方だけが知っている、私自身の歌。

それを一人でも多くの人に、聞いてもらうために。

私には、歌しかない。

私には、歌以外に、何も持っていない。

だから私は、歌に全てを懸ける。

貴方が生きた時間、私が今、生きている全てを歌に込めて、聞いてくれる人全員に、気持ち伝わるよう、命懸けで。

「おつ、そろそろワンコーラス終わりだな……おい君、もういいよ。お疲れさん」
「おいおい、もういいって！」
「もうわかったから！こつちにだつてスケジュールがあるんだよ！」
「いつまでも君の事に時間を取られちゃいけない……」
「いいじゃないか」
「社長！そんな事言つたつて時間が」
「君は……彼女の歌に、何も感じないかね？」
「は？」
「彼女がどんな気持ちで、この世界に入つてきたのかはわからん。しかし、これだけは確かだと、言えることがある」
「……何ですか」
「彼女の……彼女の歌に懸ける気持ちは、本物だよ」
「社長……」
「私は彼女の歌を、もつと聞いてみたいと思つてゐる。この業界に携わる、一人の人間として」
「君は、どうかね？」
「……まいったな。また音無さんに迷惑かけても知りませんよ？」
「……ありがとう」

手助けしてくれなんて、言わない。
祈ってくれなんて、絶対にしないでいい。
ただ、見ていてくれれば、それでいい。

これからする事は、全部私の責任。

失敗も、成功も、全部。

私はそうやって、生きていく。歌っていく。

ちゃんと、聞こえてるかな？

聞こえていないとしたら、それは、私のせい。

だとしたら、もつともつと、声を出す。気持ちに、響くように。

平和な空でボーっとしている貴方の心に、響くように。

頑張るから。お姉ちゃん、頑張るから。

だから。

届け。

届け。届け。

届け。

最後の音がフェードアウトすると共に、白が消え去っていく。
代わりに見えてきたのは、さっきまでいた、社長室。

現実だったのか、そうでもないのかもわからない。

「はあ……はあ……」
ただ息が上がり、心地よさと気だるさが入り混じった身体が、曲を歌い終えた事を伝えてくれていた。

パチパチパチパチ……

これは……拍手？

「いやー素晴らしい！よかったよ如月君！ティンときた！」

初めて、弟以外の人前で歌った本気の歌。

その相手から贈られた拍手。

何だかくすぐつたくて、とても嬉しくて。

「あ、ありがとうございます」

「しかし、君には謝らなければいけない」

「え……」

ああ、ダメだったんだ。

私の声は、届かなかったんだ。

……初めての自分からの挑戦は、失敗に終わった。

（そっかあ……ダメだったか……）

でも、私の心はさばさばとしていた。

初めての行動。初めての歌。何もかもが、初めての経験。

そんな中体験した、あの、白い世界。

怖くはない。私がメッセージを届けるための場所。あれを味わえただけで、上出来だ。

次だ。次こそは、相手に、皆に。

グズグズしてはいられない。早く、一刻も早く、次へ。

「今日は、ありがとうござ……」

「私は今まで、アイドルを育てた経験しかない」

立ち去ろうとした私を、言葉が止める。

「恥ずかしい話だが、如月君……君の目指している『歌手』専門のプロデュースをした事が、この事務所にも、私個人にもないんだよ」

評価は既に下されたはずなのに、意図が分からない言葉が続けられる。

思わず社長を見ると、また、あの顔をしていた。

年齢や見た目に関係なく、一人の人間として、真剣に、心からの胸の内をさらけ出した、社長としてではなく、彼個人の人格が滲み出た表情。

「……それでも」

私を見つめる、まっすぐな目。不相応な程の、熱さ。

「それでも私は、君に来てほしい。

私に、君のこれからを、見届けさせてほしい」

一歩外へ出れば、ここより大きなプロダクションはいくらでもある

テレビ、町並み、様々な場所で歌が流れ、顔を見かけるようなアイドルのいる

プロダクションに、このまま向かう事だってできる

「……」

だけど。

初対面の私に、取り繕うことなく語ってくれる大人が。

芸能界という、虚飾にまみれた世界の中で、損得だけでなく、歌というものを

真剣に考えられる人間がトツプにいる組織が、他にあるのだろうか。

そう、考えたら。

「よろしく願います」

「答えは、決まっている。」

「おお！　そうかそうか！」

「しかし……　そんなにあっさりと決めていいのかね？」

「どういうことですか？」

「いや、引き止めておいて何だが、君は歌手志望だろう。うちのようないドル事務所には……」

「呼ばせません」

皆がアイドル扱いをするつもりなら、

「実力で、歌手だと言わせるまでです」

自分を高めればいい。

自分の声で、気持ちで、アイドルだなんて思われなくなるまで、認めさせればいい。」

「もし私を受け入れていただけのなら、是非こちらに、お世話になりたいと思います」

私が、敬意を表せる相手の下で。

両親よりも、人間として立派な大人の下で。

「……　限りまで、磨いていきたい。」

「……　ありがとうございます」
深々と一礼され、慌てて返す。いささか気恥ずかしい。
お礼を言わなければならないのは、私の方だ。

「社長！　マジでヤバイって！」

「おお……　もうこんな時間か。如月君、すまん！　詳しい手続きは、

「その音無君に聞いてくれたまえ。私はもう行かなければ」

「は、はい」

「もう！これ以上スケジュールがズレ込んだら、また社長のお休みが

なくなっちゃういますよ？」

「そ、そいつは困る。じゃあ音無君。後は頼んだ」

一瞬でさつきまでの真剣さが失せ、バタバタと慌ただしく準備を始める。

何をしていいかわからず啞然として見ていると、社長室を出る間際、

私に向かつて振り向いた。

「如月君。今後とも、よろしく頼むよ」

それは私に、居場所を与えてくれる言葉。

「……はい！よろしくお願いします！」

「ごめんね。うちの社長って、いつもあんな感じなのよ」

くすくす笑いながら、また初めて顔を会わせた時の感じで、音無、と呼ばれた女の人

話しかけてきた。

「どうやらこれが、本来の彼女みたい。思ってたより、ずっとかわいい感じの人だな。」

「そ、そうなんですか」

「あ、私はこの事務員で、音無小鳥っていうの。よろしくね、千早ちゃん」

「音無さん……です。ね。よろしくお願いします」

「ちがう。小鳥ちゃんではないわよ」

「え？それはちよつと……その、小鳥さん、で……」

「今どきの若者にしては固いのね。ま、そこも千早ちゃんのいいところかあ」

「えつと……思ってたより、性格も、その……」

「じゃあ、これを読んで、必要な所を書き込んでくれる？」

「……千早ちゃん」

「は、はい」

「芸能界って、ホントにいろいろな事があるわ。世間の常識なんか役に立たないような、理不尽なことも、イヤになっちゃうことも、たくさんある」

小鳥さんの言葉にも、社長と同様の重みを感じた。

芸能界に何年も携わってきたからか。それとも、自身に何かがあったのか。

「ただ、腐らないで。社長がいる。私がいる。そして、まだ決まっていけないけど、貴方を導いてくれる、プロデューサーがいるから」

真剣な表情。この人も、初対面の私の事を……

「月並みな言葉になっちゃうけど……頑張ってる」

それでも。それでも私は、頑張らなければいけない。頑張っても、評価はされないかもしれない。

「ただ、頑張らなければ、死ぬ気で取り組まなければ、評価される事なんてありえない。一人で生きるために。誰かに気持ちを伝えるために。」

「はい！」

「んー、内に秘めた熱い返事って感じでいいわね。よし、合格！」

「え？今のテストが何かだったのじゃないか」

「……千早ちゃん、ホントにマジメねー」

「よくわからないけど、テストではないらしい。」

「じゃ、我が765プロの一員になった千早ちゃんに、おねーさんがこの事務所を案内してあげるわね」

「あ、ありがとうございます」

「とはいっても、部屋なんかほとんどないんだけどね。あはっ」

ともかく、小鳥さんに、事務所の中を案内してもらおう。
仕用のパソコンがどこかに古いかをしみじみと語られたときはどうしたらいいのかわからなかったけど、どこもなく楽しそうな小鳥さんを見ると、何も言えなかった。

「あつという間に終わりに差しかかるうとしたその時、」

「小鳥さん、あの部屋は何でしょうか」

「社長室の向かいに、何の印もない扉を見つける。」

「そうそう、敏腕事務員ともあるう私とした事が忘れてたわ。」

「あれはね、音源の保管部屋よ」

「音源？」

「うん。社長の趣味もいっぱいあるけどね、入ってみる？」

「いいんですか？」

「もちろん。メンバーは出入り自由よ」

「わあ……」

電気を点けた瞬間、自然に感嘆の声が漏れていた。

部屋の棚いっぱい埋め尽くされた、CDやレコードの山。

私でも知っているくらいに話題になったヒット曲が、販売店のように棚に並んでいる。

「ただ、私が驚いたのは、そこではなかった。」

「思わず小鳥さんの許可も得ずに、一枚を手にとってしまう。」

「クラシック……」

「ハイドン、ラヴェル、ドヴォルザーク、グリーグ。」

私の知識に全くない、何語で書いてあるかもわからない文字の書かれたレコード。

「アイドルや歌謡曲とかけ離れた音が、私を激しく魅了する。」

「小鳥さん。お願いがあるのですが」

「どうしたの？」

「よろしければ、事務所の都合がよい時間に、こちらの部屋をお借りして

音楽を聞かせていただけないでしょうか」

「失くさなければ、借りていてもいいのよ？」

「いえ、是非ここで」

「どれだけ借りていったらいいのか、想像がつかない。設備も環境も、私の部屋が、ここに勝るところは一つもない。」

「それに……」

「お願いします」

「あの家には、いたくない。」

「……了解。社長には、私から言っておくわね」

「あ、ありがとうございます！」

時間は、決して待つてはくれない。

どんな風に暮らしても、時間は同じスピードで進んでいく。

だけど、平等だけど、公平ではない。

ゴールまでの距離はみんな違っていて、遥か先にあっと思ったと思っていたテープがある日突然、目の前に飛び出してくるかもしれない。

誰にも、距離を測ることは出来ない。

だから、私は時間を無駄にしない。

遊んでいる暇があるなら、その分自分を高める事に使う。

ここには、その環境がある。

「チャンス逃さないように。
チャンスがやってきたときに、決してあせらないように。
私は、今の私に出来ることを、本気で、全力で、やり続ける。
『歌を歌う』
その、ために。」

今この時から、私は『765プロ所属 如月千早』となった。

「千早ちゃん、千早ちゃん」
手続きが終了し、帰ろうと思っていた私を、小鳥さんが呼び止める。

「ねえねえ、まだ時間、大丈夫かな？」

「ええ、平気ですけど……」

「じゃあ悪いんだけど、これ、書いてくれるかな？」

そう言つて、一枚の紙を差し出してきた。

見てみると、そこに書かれていたのは、ふりがなを含めた氏名欄、身長、体重、

血液型……ス、スリーサイズ……

「こ、小鳥さん、何ですか、これ？」

「千早ちゃんのプロフィールよ。プロデューサーに、アピールするための」

「だ、だからつて、スリーサイズまで書く必要は……ああ、そうか。」

「こ、アイドル事務所なんだっけ……」

「あ、スリーサイズ気にしてるの？ だいじょうぶよ。ちよつとくらいサバ呼んだって。」

でも一応、年齢は正直に書いてね。今いろいろとうるさいから」
法律とか、その辺りの話だろうか。

「今日、私は9時くらいまではここにいますから、出来たら呼んでね。ちょっと忙しくなるから、つきつきりつてわけにはいかないだけ。」

「えっと、もしかしたら、私の面接のせいでしょうか。」

「違う違う。社長がそれまでの仕事ガンガン遅らせてて、それがそのままこっちに降りかかってきているのよ。千早ちゃんには気にしないで。」

「はあ……」

「それに、千早ちゃんが来てくれたことは、絶対にいい事よ。社長にとつても、もちろん、私にとつても、ね。」

「……ありがとうございます。」

「本当に、どう答えていいかわからない。」

「少しずつ、こつちも直して言ったほうがいいのだろうか。」

「でも、まずは、歌だ。」

「不器用な私に、あつちもこつちもなんて、出来るはずがない。」

「一番やりたいことで、頂点に立つんだ。」

「そのためには、プロデューサーに認めてもらわなければ、話にならない。」

「プロファイルでも、真剣に書かなくちゃ。」

「そう思い、用紙を手を取った。」

「うーん……」

「自己アピールと……スリーサイズのところ、つまつてしまった。」

「何の取り得もない自分に、アピール出来る所なんか何もないし、スリーサイズは……」

「その……更に、自信が……」

「……そういえば、参考につて、このファイルもお借りしたんだっけ。」

「……ちよつとすがりつく思いで、パラパラとめくつてみる。」

「そこには、私と同じアイドル候補生の、同じ形式のプロフィールがまとめられていた。うわ……こうやって、私のも閲覧されるようになるんだ……」
恥ずかしくなりつつも、みんなのプロフィールをつい見てしまう。

普通っぽい感じの女の子。その……少々読むのにコツがいりそうな字を書く女の子。元氣いっぱい双子らしき女の子たち。男の子みたいな、女の子。……
大らかで、お姉さんのような感じの、きれいな女の子……

みんなそれぞれに特徴があつて、でも可愛らしく、立派なアイドルになれそうな子が、プロフィールの中に存在していた。

みんな、アイドルになることを望んでいるのだろうか。
私のような人は、いないのだろうか。

「考えたって、しょうがないか」

私は私。誰がどうであろうと、私の意志は、変わらない。

変にみんなを意識することはない。

私は、アイドルになる気はないのだから。

もう、自分の心を偽るのは、嫌だ。

正直に、書こう。

結局、私が私であるためには、そうするしかないんだから。

でも、スリーサイズの欄を書き込んだときは、やっぱり、
……くっ

そう呻かずには、いらなかった。

気を取り直して、最後の自己アピールに取りかかる。

さっきのファイルでは、みんな思い思いの方法で、アピールをしていた。

だけど、これも、私の望むものとは違う。

私に必要なのは、ありもしない可愛さをアピールすることではない。

トップを目指すための、実力をつけること。

そのためなら、どんなにつらくたって、構わない。

そんな思いが少しでも伝わるように、文字に思いを乗せて、書いてみたつもり。自分の才能のなさに、ほとほと愛想が尽きる。

それでも、この文章に、気持ちに向いてくれる人がいたら。

これを見て、私を鍛え上げてやろうと、思ってくれる人がいたら。

妥協を許さない人が、私のプロデューサーになってくれたら、いいな。

「小鳥さん、完成しました。ファイル、ありがとうございます」

「お疲れ様ー。ごめんね、引き止めちゃって」

「いえ、明日からまた、よろしくお願いします」

「こちらこそ、いいプロデューサーが見付かるように、応援してるわね」

「ありがとうございます。では、お先に失礼します」

「私が私であるために、私はトップを目指します。」

そのためには、どのようなレッスンでも耐えて見せます。

ご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします」

それから、部屋にこもる日々が続いた。

時間があれば事務所に行き、小鳥さんに挨拶して部屋の鍵を借りる。

昼間でもカーテンを引き、電気を消して、視界の一切を消す。

こうすると、音の一つ一つが、よりクリアに聞こえる。

同じ曲、同じ楽譜でも、弾く人が変われば音が変わる。

楽器自体のいい悪いではなく、人が、音を変えらる。

自分の耳で実感できたとき、本当に嬉しかった。

ほんの少しだけ、自分が成長できた気がした。

（でも、まだまだ）

決して、限界を決めてはいけない。

まだ、スタートラインにも立っていない。

頂点を極めるまで、立ち止まるわけにはいかない。

「声
そんな私に、小鳥さんが何かと差し入れ（主に甘いもの）を持ってきてくれたり、
を掛けてくれた。」

「だ
「はいじょうぶ？ 千早ちゃん」

「何
「何がですか？」

何が大丈夫なのか、私にはわからない。

ただ、こうして心配してくれる人がいることが、嬉しい気がした。

もつともつと頑張らなければ。そう思った。

「い
いつものように事務所を訪れる。」

「小
「小鳥さんが、普段以上にきびきびと動き回っている。」

事務所の雰囲気が違う。小鳥さんだけではなく、全体的に慌ただしいというか。

「新しい候補生でも、入ったのだろうか。」

「それなら、私ももっと努力しないと。」

同じ事務所でも、芸能界に入ればライバルになるのだろうか。

一番の敵は、常に私自身の中にあるのだから。

人に構わずに頂点まで上り続けるためには、実力をつけるしかない。

そう信じて、暗闇の中、私は佇む。

張り詰めた空気の中、幾重にも連なる楽器の音を聞き分ける。

「耳だけでなく、身体全体を使つて、感じ取る。」

「この曲……。ブラームスの口短調に似ている。けど、抑揚の付け方と、

振り幅が、やや大きい。」

また新たな発見をした、その時だった。

コッソ

「明らかに楽器ではない、無骨な音。そして、何かの気配。」

「あつ!? 誰、です!?!」

反射的に、声を上げていた。

小鳥さんが入ってきたのに、気づかなかつたのだろうか。

それにしても、気配が違う……

「あ、ごめん。おどろかせちゃったな。今、電気をつけるよ……」

聞いたことのない声。
スイッチが入り、人工的な明るさが周りを包むと、声の主の姿が、私の前に現れた。

何の印象にも残らない人。

それが、この人の、第一印象だった。

見た目も、服装も、口調も。

しいて言えば、「芸能界にいる感じのしない人だな」くらい。
目の前にいるのは、そんなごく普通の男の人。

「はじめて見る人ですね。なにか用でしょうか？ 今、忙しいのですが」

何の予感も感じなかった。

「そう、邪険にするなよ。俺は、君の面倒を見ることになった、プロデューサーだ」
そんな私にはつきりと告げられる、未来への道標。

「あなたが、私の？ …… …… ……」

こうして、私は彼と出会った。

仕事として、事務所にやってきた彼。

仕事として、それを受け入れる私。

運命的な要素なんか、欠片も存在しない。

だけど、いつだって、大事なものに気づくのはずっと後。

迷って、悩んで、後悔して。

いろんな出来事に振り回されて。

道の険しさに、絶望しそうになって。

それでも私は、歩いていく。

歌で、頂点を極めるために。

口下手な私の気持ちを、正直に、皆に伝えるために。

彼と、一緒に。

この瞬間から、プロデューサーと私の物語が、始まる。

如月 千早 序章

発行 : だーくぱれす。

文責 ; もとぬき

編集 : ひめまさ

発行日 : 2007 年 12 月 31 日

印刷 : (有)ねこのしっぽ様

URL: <http://www5e.biglobe.ne.jp/~motonuki/>

MAIL: motonuki@xqe.biglobe.ne.jp